

# 「やってみなはれ」の精神で 生徒と共に挑む活気ある学校づくり

津久井高校(神奈川県立)



「やってみなはれ」と記した職の下に、おそろいの校章入りポロシャツを着て集まった全日制・定時制の先生方。最前列中央が熊坂和也校長。

## 反対意見も歓迎し 徹底的に意見交換

神奈川県北端に位置し、全日制普通科・福祉科および定時制普通科をもつ県立津久井高校。生活面・学習面に課題があり、モラル・マナー・ルールの遵守や基礎学力の育成などに力を入れてきた学校だ。そんな同校に2017年度着任した熊坂和也校長は、「素直で無邪気な生徒たちと、生徒のために動ける先生たちがいるこの学校は、手立てをすればきっと良い方向に変わる」と確信したという。

熊坂校長は着任して間もない職員会議で、「生徒が生き生きと活動する学校」に向けた改革宣言を発表。その第一弾として、定期テストの廃止を提案した。テスト範囲が広いと勉強をあきらめてしまう生徒が多いことから、定期テストの代わりに、よりスモールステップを踏める単元テストなどを実施し、こつこつと努力する力を伸ばすのがねらいだった。

生徒の学習意欲の醸成に行き詰まりを感じていた教員は多く、好意的な反応もある一方、反発もあった。そんな反対意見に、熊坂校長は徹底的に耳を傾けた。

「多様な意見が出るからこそ組織は活性化するもの。反対意見は大歓迎です。『あなたはどうしたい?』と話を聞き、その場で結論が出なくても、お互いに言いたいことを言い尽くすよう心掛けています」(熊坂校長)

こうしてさまざまな意見交換が行われた結果、18年度から中間テストのみ廃止し、新たな運用を行っている。

## 現場からの提案で ユニークな取組が続々

改革の動きは現場からも起こるようになった。その一例が、授業について語り合う「シェアCAFE」の発足だ。授業中、生徒の居眠りやスマホいじりは日常茶飯事で、対応に悩む教員は多い。そこで、教員がストレスを溜め込まないように、愚痴も含めてオープンにでき

## 津久井高校 この3年間の動き

### 目指す 生徒像

- モラル・マナー・ルールを遵守できる生徒
- 基礎学力を身に付け活用できる生徒
- コミュニケーション力・行動力を発揮できる生徒

### 主な 教育実践の 変革

- 定期テストの見直し(単元テスト・小テストの活用)
- 授業のユニバーサルデザイン化の推進
- 「授業で守る5つのルール」(生徒編・教員編)の設定
- 遅刻なし・制服着用を推進する(推進週間)「元気アップキャンペーン」実施
- 定時制で実施していた生徒の居場所づくり(ポルトカフェ)を全日制にも開設

### 変革を 支える 環境整備

- 授業について語り合う場の設置(シェアCAFE)
- 校長室の扉を常に開放
- 生徒会執行部からの意見収集
- コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)
- 地元やPTAとの連携強化

る場をつくってはどうかと、18年度に研究開発グループでアイデアが生まれ、すぐに実行され、月1回の開催に定例化。毎回、若手中心に10〜20人の教員が集まり、リラックスした雰囲気です語り合っている。管理職は参加せず、お茶菓子の差し入れのみ行っている。「二番の目的は先生方のストレスへの対処。とかく若手は悩んでいるのは自分だけと思いがちですが、先輩教員も同じように悩みなが工夫していると知

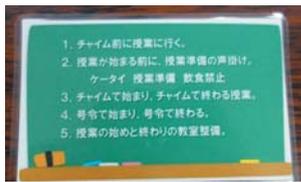
るだけでも、気が楽になるようです」(研究開発グループサブリーダー・瀨川洋平先生)

会議や研修とは一線を画し、統一的な決定や成果は目指さないが、毎回テーマを設定して話している。ある時は、教員研修で決定した「授業で守る5つのルール」について、実施してみようだったかを語り合った。また、ある学年が始めた授業のユニバーサルデザイン化をテーマにし、その工夫を他学年と共有

「シェアCAFE」の様子。参加者からは、「授業の悩みを気軽な雰囲気の中で吐き出すことができスッキリ」「他の先生の考え方を知ることができ、自分の考え方も伝えられるのが良い」などの感想が聞かれた。



「授業で守る5つのルール・教員編」をカードにし、教員はネームホルダーの裏側に入れて持ち歩いている。生徒も授業中にルールを目にできるよう、背中に「生徒編」を印刷した教員用ポロシャツの製作を検討中。



体育祭や球技大会には教員チームも出場し、本気で勝利を掴みにいく。生徒は「先生たちには負けたくない」と対抗心を燃やすようになった。

熊坂校長は生徒とすれ違うとき、必ずひと言葉しかける。授業中ふらっと教室を訪ね、空席に座って生徒目線で授業を受けることも多い。



校長室の一角には熊坂校長が実現させたい「津久井高校未来予想図」を掲示。「閉じこもっていたら生徒を掴めない」と校長室の扉は常に開放し、教員や生徒が頻繁に出入りする。

「『ねばならない』と強いられると面白さが感じられなくなるので、その場にあがった情報の中に参考になるものがあれば取り入れてください、と個人に委ねています。そのなかで自然にお互いを高め合っていけたらと思います」(研究開発グループリーダー・林睦先生)

現場発の取組例には、学務推進グループリーダーの田中和博先生が企画し、有志を募って実施した「元氣アップキャンペーン」もある。これは、生徒が遅刻せず制服をきちんと着ていたらポイントが付き、貯まると食堂利用券に引き換えられるというもので、18年度に3カ月間実施した。

「できなかったら減点するより、できたことを肯定することで、生徒が前向きな気持ちで学校に来られるようにと

考えました(田中先生)

現在、田中先生は、交通の便が悪い同校においてバイク通学の制度化に取り組んでいるところだ。神奈川県はこれまで高校生のバイク利用を厳しく規制してきたおり、不可能ではと思われてきた案件だが、「生徒のためになることなら固定観念にとらわれず取り組んでいきたい」と実現を目指している。

**「うんと失敗しよう」と教員の挑戦を促す**

こうした同校教員の挑戦の背景には垣間見えるのが、熊坂校長がモットーとする「やってみなはれ」の精神だ。教員からアイデアが出ると「やってみてうまくいなくても、次にどうするか考えればいいだけ」と後押しする。

「失敗を経験したことのある人の方が

いい仕事をするというのが私の考え。先生たちには『うんと失敗しよう』と呼びかけています」(熊坂校長)

最近では若手教員も、部活動加入促進のための体験入部の実施や、体育祭の種目の変更など積極的に改善案を出しているという。

「どんな大河もちよろちよろの流れが集まってできるように、小さな変化を積み重ねていくといつか大きな変化になる。とにかく流れを止めないことを大切にしています」(熊坂校長)

**教員の明るさ・前向きさで学校全体に変化の兆し**

目指す学校像に向けてまだ課題は多いが、取り組む同校教員から伝わってくるのは、挑戦を楽しもうとする明るさや前向きさだ。そのなかで生徒の様子も変わりつつある。体育祭や球技大会では生徒の、やらされ感が薄まり、本気で競技に打ち込む姿が目立つように。また、地域から同校に入る連絡には、肯定的な感想や激励が増えた。近隣中学校からは「安心して生徒を送り出せるようになった」との声も聞かれるようになってきた。

改革の主体となった先生たちは…

**何も変えないのは楽だがつまらない**

田中和博先生

何も変えない方が楽ですが、それではつまらない。僕自身も楽しいと思えることを、型にはまらず仕掛けていきたい。僕が率先してやることで、若い先生方にも「やっていいんだ」と思ってもらえたら嬉しいですね。

**ワクワクすることをしたい**

林睦先生

決められたことより、ワクワクすることをしたい。失敗してもいいなら、なんでもやっちゃおうと、今、福祉科の学習の一環として、校内に認知症カフェを開設してはどうかと考えているところだ。

**失敗を恐れず挑戦しよう**

瀬川洋平先生

何かあれば校長にも相談。「やってみなはれ」と言われることで、失敗を恐れず挑戦しようと思えます。本校には大変なことも多いですが、これまでにないやりがいを感じています。

「学校づくりは教員だけがんばればできるものではありません。生徒一人ひとりがわが校をこうしていきたいという意思をもって行動し、その意識が先輩から後輩へと受け継がれれば、教員が入れ替わっても学校は良い方向に向かっていくはずですよ」(熊坂校長)

生徒にも広がっている「やってみなはれ」の精神。どう学校づくりに生きていくだろうか。

取材・文/藤崎雅子